

滝山の里山に出現の曼荼羅金胎両部界
～ 山（凸） と 川（凹） ～

.....

構成骨子は次のとおり。

第1章 パート1 山（凸部）から入る

1. ルートの概要
2. 歩き道の状態
3. 「胎蔵界」の見立て～周回ルート形状は蓮の蕾みに酷似
4. 「金剛界」の見立て～周回ルートを反転させた
5. 「曼荼羅金胎両部」の見立て

第2章 パート2 川（凹部）から入る

第3章 里山・中山・深山

第4章 発展系

おわりに

（上桜田の大沼香）

私は若い頃から登山をやって来たが、山を跋扈する者となれば、役行者の修験道（修験者、山伏）と直感・直結的に浮かびます。密教・道教・陰陽五行と習合したが故に、山中を胎蔵界と金剛界^{たにあい}に対比的に見立てます。例えば、山を二分して北（東）半分を金剛界、南（西）半分を胎蔵界、尾根筋を金剛界、谷間を胎蔵界、北上を順峰、南下を逆峰などです。

私もその影響を受けて、山に入り自然界に浸ると何かと胎蔵界と金剛界に対比的にイメージしてしまいます。以下はその延長線上にあります。

第1章 パート1 山（凸部）から入る

「隣の芝生は青い（きれい）」「近くの神様より遠くの神様」と言われ、遠くのものに関心が向きがちです。しかし、アウトドア志向派の中に、昨今は足元の「里山」を見直し、魅力を再発見しようという動きがあります。地産池消と同じ思想です。

そんな事もありまして、国土地理院の地形図を眺め、自宅近郊の里山なる千歳山と戸神山と恥川の3点を何とはなしに見ている時、一瞬頭を何かが過ったのです。しかし、その時は、それが何なのか具体的なものはまったく想像出来ませんでした。我が郷土のこの3点セットを関連付けると、どうなるのだろうか。尾根筋を歩いて一周すると、未体験の新しい発見があるのではないかと言う直感が湧いて来たのです。そこで実際に山道を歩いて見ました。その体験の中で生まれた私説曼荼羅の世界を書いて見ます。まずは山に拘ります。山々、すなわち峰々を繋いで歩く事にしました。図-1を参照下さい。最初は、2011（平成23）年12月14日（水）戸神山から登り、千歳山に至る左回りのルートを見て見ました。2回目は、2013（平成25）年3月24日（日）、今度は逆向きに、千歳山から登り、戸神山に至る右回りルートを見て見ました。同じルートを往復した事になります。



図-1

GPS 機器（ガーミン社製／オレゴン 450）を携帯し、この踏査の軌跡を記録したので、この時の軌跡・足跡の形状へ話を進めて行く事とします。図-1 の赤い線（白黒では濃い線）が GPS 軌跡（トラックログ）です。このルートの沿面距離は 12 km ほどで、標高差約 440m、7 時間 30 分前後を要します。1 日掛かりの行程となります。短いがきつい登り下り・高低差もあって里山遊びにしてはとても充実感を味わえるフィールドです。

以下は、私から見た雑学の範疇ですが、私の浅学菲才の頭の片隅にある瀧山信仰の興退・栄枯盛衰の変遷を流しつつ、この領域に踏み込んだ体感から、曼荼羅宇宙の想像力を並流させて、独断と偏見で考察して見ました。以下に使う「曼荼羅」は純粋な、学問的・宗教的な意味合いよりも「私の手に負えない不思議なもの」の意味合いで使っています。

1. ルートの概要

2 回目のルートを取り上げます。図-1 左上の突端（山形市松山二丁目の石碑群）S 地点から登り始め、平清水春日神社を經由し、千歳山公園に降り、そこから千歳山に登り、尾根伝いに東南方向に歩きました。三角点のある標高 537.6m を經由し、有料道路「西蔵王高原ライン」に至る舗装車道に一端降ります。そこから尾根を辿るように道のない所に踏み入れ、右手に恥川の源流筋を確認しながら、つまり、源流に至る川底を確認しながら歩を進めました。やがて標高 550m ほどのピークに到達し、そこが分水嶺となる源流点と確認出来ました。この P550 地点の雨（水）の一滴が、恥川の源流となる事が地形的判断から分かりました。その P550 点から、向きを右方向に変えて、つまり、北西方向に尾根筋を辿りながら歩くと、また、前記舗装車道に降ります。さらに歩を進め、猿岡山を經由し、鬼越を通過し、戸神山の山頂に到達しました。そこからは、向きを北方向に変えます。急傾斜地ですが直線的に下り、戸神山稻荷神社のすぐ傍に到達し、G 地点經由で S 地点に戻り終了しました。なお、2 回ともいわゆる渇水期でありました。概括的に言えば、平清水の「恥川」を取り囲む直近の尾根筋を連ねて周回した事になります。つまり、恥川分水嶺を忠実に辿り一筆書きで周回したという事です。いわば、「恥川」と対面しながら、「恥川」をお守りしながら、「恥川」を参拝しながら歩いた踏査ラインが図-1 のとおりという事です。P550 点について付け加えておきます。分水嶺の結束点であり、降った雨（水）が恥川へ流れて行く分とそれ以外の方向に流れて行く分をコントロールしている地点でもあります。いわゆる「水分^{みずわけ}」点です。現地ですら思った時に、各地で祀られている「水分^{みくまり}神社」が浮かんで来ました。「水分^{すいぶん}神」は、水源を司る、あるいは流水を分配することを司る神です。有名なのが「吉野水分神社（奈良県）」です。一度行って来ました。P550 点には「水分神」が宿っている雰囲気がありました。その地点の状況は、図-2 のとおりです。

それでは、実際に歩いて見て、あれこれと気付いた事柄に展開して行きます。

2. 歩き道の状態

S 点の登り口から前記舗装車道までの、つまり、周回ルートの北側の殆どは、踏み跡がしっかりしていて、いわば登山道になっています。そして、同舗装車道から P550 点に至り、向きを変えて南側のルートを進み、再び同舗装車道に至るルートには踏み跡もなく、一部濃い藪になっています。なお、この道の無い部分は、積雪がある時は問題無く、普通に地形を判断し、方向感覚があれば、樹木の繁茂期は別とし



図-2

て、春と秋は、歩きは可能です。ただし、この同舗装車道と P550 点との間は、地形の大きな凹凸変化はなく、不用意に入れば迷います。その同舗装車道から猿岡山へ、その後の戸神山間は、作業道と思われる踏み跡があり、所々で切れているものの、ほぼ繋がっており歩く事は可能です。戸神山から真北へは急降下ですが、明瞭な踏み跡があります。それらの踏み跡は、里山歩きの登山者や私有地管理のために立ち入った人に依って、固められたものと思います。当然ですが、この全域には、周回を促す案内標識や目印などはまったくありません。したがって、立ち入りは全て自己責任です。なお、このルートは公私の地権者が混在しているのかもしれませんが、通らせて頂いた事に心より御礼と深甚なる感謝を申し上げます。

3. 「胎蔵界」の見立て～周回ルート形状は蓮の蕾みに酷似

以下、話を進めるに当って、私の底流に「陰陽二氣説」の視点がある事から簡単に触れておきます。物事、表面的にはそれぞれの象・形は異なるが、つまり、異質・異体であるがために陰・陽の性質を帯び、対立・相反の関係にあるものの、この世の事象は、元来、同根であるために、一方で、相互に往来・融通・流動の性質をも内蔵しており、時に応じて究極の交感・交合に進展します。逆に、異質のものが合体する事があるというのは、この世の森羅万象は表層的に、あるいは一時的に対立性が表れても、^{もと}元々・^{もと}本々は、根源的に内包する密接不可分の表裏一体性、同根同体性の神髄を持っている、従って吸引し合うという事の証になります。さて、そもそもの直感の引き金は『はづかし』です。前記図-1の周回を終え、踏査ラインの形状を振り返った時、直感、とても秘めやかなもの、^{なま}艶めかしいものを観想したのです。陰陽二氣説の知識が少しあった事から派生したと思われるある直感がありました。弘法大師空海が体系化した世界観の曼荼羅宇宙の事です。金剛界と胎蔵界の「^{こんたいるょうぶ}金胎両部」をペア（対）・表裏一体として、それぞれの中心に宇宙で最高の万力を内蔵した「大日如来」（⇔天照大御神）を配置しています。そこから次のような展開が浮かんで来ました。平面的・立体的・断面的、十方の眺めから想像力を駆使すると様々な模様が見えて来るがその中の一面という事です。曼荼羅の大宇宙を人体は小宇宙に重ねると、つまり、宇宙曼荼羅の擬人化によれば、金剛界曼荼羅は男性原理（光を放ち根源たる太陽）を内蔵し、胎蔵界曼荼羅は女性原理（光を受けて存在意義の根源たる月）を内蔵します。まずは胎蔵界からの眺めです。図-1周回ルートで描かれた線形を俯瞰し想像すると、蓮の蕾みを斜めに寝せて、蕾の外環ラインをなぞった（トレースした）ように見えて来ます。その外環ラインの内側中央部に恥川のラインが引かれていると見えます。すると図-1のSGラインより右側全体は、女性の身体（断面的に見た下腹部）に見え、右側のそのライン形状は下腹部に奥まった女性内性器（凹部形状、陰物、女陰）の相似形として見えて来たのです。ここに至ってこれが、冒頭、ある何か^{よぎ}が過ったというものの何かである事が認識されました。また、大日堂跡地の場所は、恥川の川筋上流にあつて、最深部に位置しています。すると、周回ルート尾根筋はその部位1、恥川は部位2、大日堂跡地は部位3、P550地点は部位4に相当するものと見えて来ます。「恥川」の「はづかし」の意味にぴったりというように陰形が先の方で少し曲がっています。まさに恥しいからちょっとひねっている、隠そうとしていると言う見方が出来ます。恥川は、膣すなわち母体の産道に見立てられ、大日堂跡地周辺は子宮に見立てられます。宿った胎児は簡単に流産しないように子宮部位が右下に奥まった形に収められています。恥しいからちょっとひねっているというよりは、胎児が簡単に膣外に飛び出さないように抵抗部位を持たせ、そして胎内生育・出産するまでの絶対愛護の所（子宮→性域→聖域）にしたと思うのです。この恥川包圍形状領域はまさに裏側に女陰的構造を秘匿しているのです。女陰全体構造、その受胎能力などを包含した女性原理に繋がる領域です。

それにしても「恥川」の名称の響きから想起される雰囲気は、「胎蔵」は直訳的には胎児を宿る蔵・ところ、でしようが、それらからは女性・母体・子宮・受胎が連想されて来ます。ここに、踏査ライン形

象、内性器、凹部形状、女体、胎蔵界が連結されたのです。

4. 「金剛界」の見立て～周回ルートを反転させた

前述においては、周回ルートで描かれた線形を蓮の蕾みの外環ラインと見ましたが、今度は金剛界からの眺めです。それでは、金剛界から眺めるとどうなるかと言う事であります。金剛界は胎蔵界とはペア（=対→対極・反転）の関係を内包していますから、図-1を上下反転させて見ると図-3のようになります。すると同図のGSラインより左側全体は、男性の身体（断面的に見た下腹部）に見え、右側のそのライン形状は、下腹部から突き出た男性外性器（凸部形状、陽物、男根）の相似形として見えて来たのです。上向き形状と「金剛」の意味合いが相俟って、硬く生きている金属の棒のように映って来ました。この恥川包圍形状領域はまさに裏側に男陽的構造を秘匿しているのです。

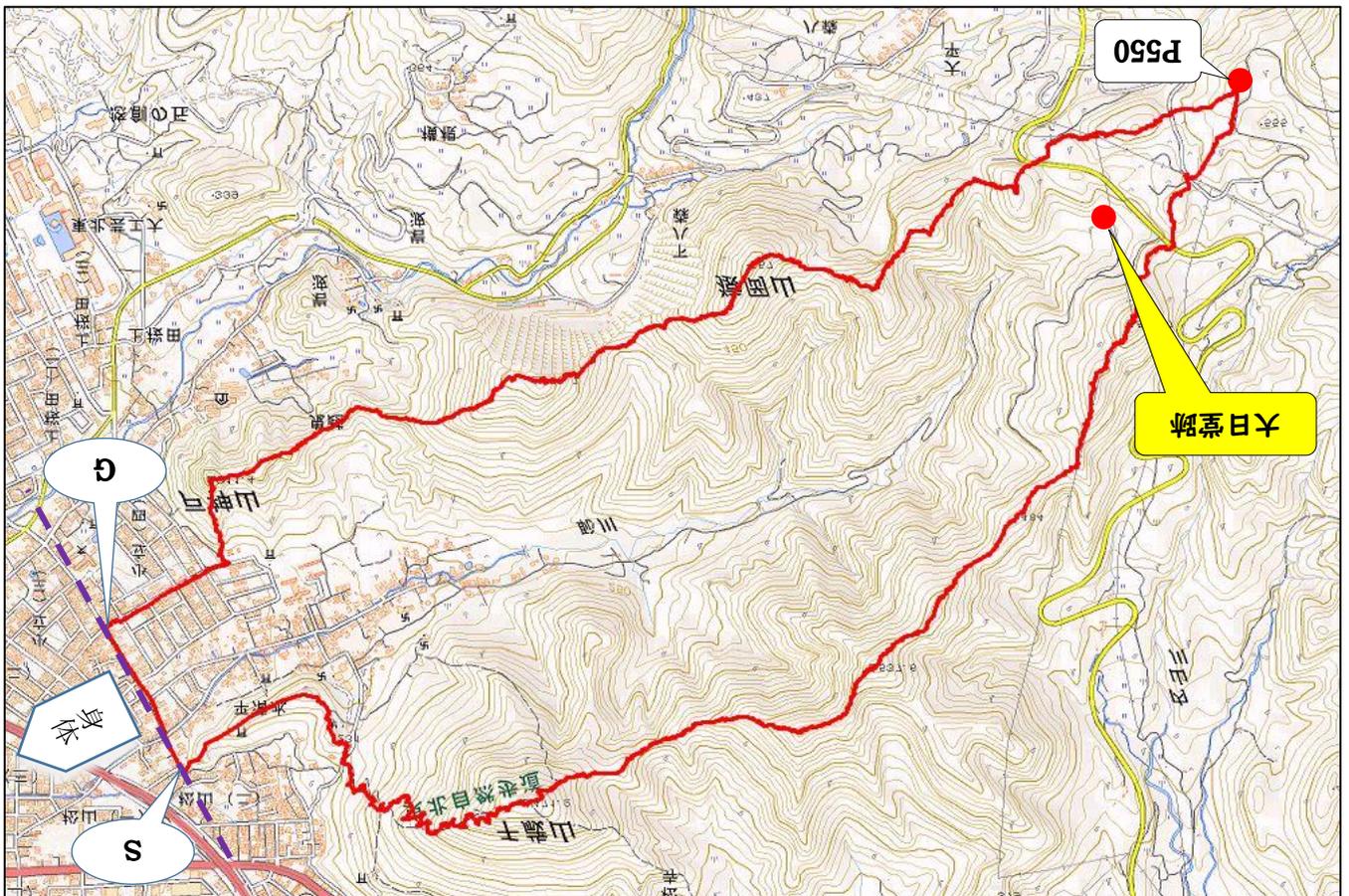


図-3

この形状に於ける恥川の川筋は、(裏側にある)胎蔵界の秘所たる大日堂跡地周辺(子宮)に向けて突進して行く金剛界行者(精子)の通り道、すなわち青春通り(参詣道→産道)でもあります。「せいしゅん」の上三文字(この三は、過去・現在・未来の三世を意味)を切取ると「せいし」です。それは「正視」(物事を正面から正々堂々と真っ直ぐに見て、その方向に邁進する事)にも結び付きます。本々、男の男たる所以は、子孫繁栄の主宰者としてこの姿勢——文字を反転すると勢姿(威勢の良い姿) = 正視←→精子——を以って貫徹する王道の実践にあります。男根全体構造、その生殖能力などを包含した男性原理に繋がる領域です。ここに、踏査ライン形状、外性器、凸部形状、男体、金剛界が連結されたのです。少し横道に逸れますが、男としての太陽は自ら発光します、女としての月や子供として

の星は、太陽の光を受けて初めて光ります。つまり、順序は太陽があって、月や星が輝くのです。これは能力の順次ではなく、働き・作用としての順次です、男尊女卑ではありません。

5. 「曼荼羅^{こんたい}金胎兩部」の見立て

◇その1：曼荼羅界の対極性

前記「3、」と「4、」とを合わせて考えて見ます。胎藏界の女性・凹部・下向き・右側が身体は、ペア・対極の金剛界から観ると、胎藏界のそれぞれは、男性・凸部・上向き・左側が身体に、置き換えられます。これらの事をこの領域に被せて見ると、曼荼羅「金胎兩部界」の認識の出現に至ると言う事になります。千歳山～P550点～戸神山に至る尾根筋の恥川包圍領域は、同じ場所でありながら、胎藏界から見れば女性の内性器（陰物、大陰唇形状）に照応し、金剛界から見れば、男性の外性器（陽物、陰莖形状）に照応します。地理的には同じ場所ですが、凹凸反対の性質を帯びたもの、つまり両極のものが重なって観えるのです。これらから恥川包圍領域はまさしく曼荼羅金胎兩部の原初世界に付合すると解釈したのです。このように文字化出来るという事は、私が、この地の秘術に誘われ惑わされて嵌^はまってしまったという事です。恥川は包圍形状の中央部に位置しますが、別の角度から見ます。「中」は「どちらにも偏らない、過不足のない理想の位置」を意味し、「中^{ちゆう}する」（中道・中庸をとる、片寄らぬ姿勢をとる）」に繋がりが、言い換えれば、「中」は左右に離れたもの・隔てられたものを引き寄せる吸引力を内包した言葉です。あるいは、「中」は陰陽を生む根源であるとも言えます。すると、このような胎藏界・金剛界見立ての中で、恥川は両方に共通して中央部に位置する事から、両極（上下・左右）——凹凸（女男）の相・事物を吸引し、和合・調和する生命生殖力のエネルギーを持っていると解釈出来るのです。別の角度から述べて見ます。男女・凹凸像形の象徴的な特徴を一つだけ挙げるとすれば、男性器については、その特徴は上向き金剛棒様相です。撓^{しな}った上向きは天空の王様すなわち太陽に向かい突き刺さらんとする勢いそのものであります。太陽の持つ火（熱・光）の力には、物事の穢れを焼き尽くす至上の浄化力があります。女性器については、この宇宙に於ける最高の神秘は妊娠・受胎です。神秘的な世界で胎児の成長を育む絶対不可欠のものが羊水（水）です。その水には穢れを洗い流し尽くす至上の浄化力があります。片や火、片や水で陰陽対峙・相克の関係にあるが、「穢れ・煩惱の浄化力」の点では共通・一致します。一致はすなわち合体と同態です。

一方、天すなわち太陽は万物を生成・分化する力があり、川すなわち水は万象を飲み込む・統合の力があります。すると天・太陽は男の陽（易では乾^{けん}）相を持ち、川・水は女の陰（易では坤^{こん}）相を持っているが事になります。また、日本国創生原初期からの思想風土は、自然崇拜・自然信仰から始まったと云われています。国土を形成する自然要素は大きくは、大気、水、土です。そこから生まれたのが、植物・樹木、川・湖沼、岩石・山です。それらが信仰の対象となって来ました。この3要素の中で生命力を有するのは、植物・樹木です。これは、ご承知のとおり光合成で生育します。土壌からの水と大気中の酸素が太陽の光（→火・熱）で化学反応を起し、ブドウ糖と酸素と再生水（元の水とは違う）が生成されます。陰陽五行説を持ち出せば、植物の生育に相克関係にある火（太陽）と水（川）が不可欠だと言うのです。

以上の点から、この恥川包圍領域は、それらの対置関係にある相が重層化、積層化、多層化しているゾーンなのです。物理的・地形的に同じ場所ではあるが、二つの相異なる対置の関係を内蔵し、逆に対極に見えるが同じものである事から、どちらにも為り得る融通無碍・循環の相で結ばれている靈妙な領域なのです。私はこれらの中からキーワードとなる語をピックアップし、男と女、天と水を組み合わせ、^{なんてん}「男天

によすい
女水の神秘ゾーン」とも表現しました。さらに派生的に浮かんで来ました。古事記にある伊耶那岐神（男神）と伊耶那美神（女神）の二柱に依る国産みのシーンを極々簡単に取り上げます。人に依っているいろいろな意識がありますが、

伊耶那美「私の体で、1か所だけ足りず窪^凹んでいるところがあります」、伊耶那岐「私の体で、1か所だけ余って出^凸張っているところがあります。それでは、私の出^凸張っているものを、あなたの窪^凹んでいるところに差し入れて国を生もう。」天の御柱を回って声を掛け合うのですが、女性神那美が始めの声掛けして生んだ子の水蛭子は水に流してしまい、次に男性神那岐が始めの声掛けをして無事国生みに成功します。非常にシンプルな凹凸の塞ぎ・埋め合せの行為が描写されています。動物の生命のリレー・バトンタッチは、生殖感合の行為から始まりますが、この至って単純明快な凹凸構造の一对一の結び付きを、少し広げて磁気のN対Sの男女の組み合わせによって、生命の誕生が成るのです。その生まれた命は、複雑多様で神秘を溶融した万物の霊長足る人間が育まれるのです。

もう一つ、「*安岡正篤——終戦詔勅を刪修（不要な字句をけずり改めて、文章を良くする）し、「平成」の元号の考案者——講述（芳村玲好編／三五館）」に次のような処があります。「・・・男（陽の相）らしい男はお金を持つとすぐ使う。まず遣^{つか}うようなことを考える男でなければ、男性的でない。『握り屋』なんていうのは非男性的である。けれど反省して、男は貯蓄する。女（陰の相）は本能的にお金を貯える。それは家とか子孫を考えるから、どうしても「陰」の力で含蓄する。そして反省して、『あっちへ義理』『こっちへ人情』でお金を遣^{らんび}う。濫費するような女は、女房として持つべからず。「女房は濫費癖、亭主は握り屋」であるというのは、「陰陽相反である。」・・・

同安岡氏の言葉から連想がありました。男の陽物は事に臨む時は、通常上向きが下向きに、つまり天（太陽）を目指してロケット弾の如く変容し、卵子との一期一会を求めて金剛力を発揮します。その度が過ぎるとあっちこちに手を出す浮気心が出て来て、人倫に反する勢いが出がちになる、それを反省として、必要以外の時はものを下に垂れている、天（陽）に対応する地（陰）に向ける事になっています。女の陰物は事に臨む時は、通常下向きが上向きに、精子との一期一会を待ち受けて吸引・含蓄力を発揮します。その度が過ぎると締りがなくなっていつでも受入れOKの開放状態になって、人倫に反する勢いが出がちになる、それを反省として、必要以外はものを貝殻のように固く閉じている事になっています。これも開（陽＝天）に対する閉（陰＝地）の作用です。

◇その2：大日如来の聖地

図—4のように、この領域には、靈異性を帯びた靈地としての平清水平泉寺（瀧山信仰隆盛時代の本坊）と南竜山不動尊（籠りの堂宇は無いが、不動尊は現存）が配置されています。前者は「恥川」の右岸に配置され、後者は左岸に配置されています。「右と左」の両極・対極のバランスが意識されて配置されています。南竜山不動尊の本尊は不動明王、不動明王は大日如来の化身です。平泉寺・大日堂の本尊は大日如来です。そうすると三者のご本尊は大日如来で共通です。なお、「滝山 歴史の散歩道案内人会 合同研修会資料（平成19年7月8日）」に依れば、南竜山不動尊の興りは、平清水村の嫁おゆき（妙現尼）の物語が発端です。この話の年代は江戸中期ではあるが、この地は古来より聖気漂う敵地であり、その昔は修行場の一つであったと思っています。この領域には、これらの他に耕龍寺周辺に数多くの史跡が点在していますが、解説は他に譲りここでは取り上げない事にします。前出安岡正篤はその著書「日本精神通義（黙出版）」で、大日如来について、とても含蓄のある表現をしているので紹介します。「大日は、暗を除き遍く明らかにする事——世間の日（太陽の明り）は夜を照らさず、物の一面は陰となりますが、そう言う事の無い、一切処に依じて大照明を成すものであります。」



図-4

◇その3：金胎両部界のプロデューサー

この領域の形状や諸堂の配置は、偶然の事象ではない気がします。まずは、延喜式祝詞「大祓詞」に「神集へに集へ給え 神議りに議り給えて・・・」とあるとおり、八百万の神仏（かみほとけ 往古からの天神地祇信仰、当時の神仏習合の時代背景に鑑み、意図的に仏を入れている。）が知恵を絞って作成したこの地の_{下書き}ドラフト設計図（有史以来の聖域）があったはず。その八百万の神仏が描いた設計図に、生身の人間界の活動・営為を重ね合わせ、意図的に修行道場を形成・構築し、仕上げていった歴史上の人物がいたはず。それは今で言うプロデューサー、誰だったのであろうか。「最澄なのか、空海なのか」「行基菩薩なのか、円仁慈覚大師なのか」「はたまたその弟子達なのか」・・・。良く語られるのが、弘法大師空海が高野山に真言密教の道場を開く時、地主神の「狩場明神（高野明神）」が高野山を譲ったと云われています。また、伝教大師最澄が延暦寺の建立に当たって、比叡山の地主神たる^{おやまくいのかみ}大山咋神（日吉大社）に挨拶したと云われています。これらから察するに、この滝山に、この領域を道場化すべく構想・企画立案したプロデューサーがいて、それはすなわち土着の地主神（当時は実在の人物）であり、当人物自ら最高指揮官となって一大プロジェクト事業を推進し、開発・整備を図ったものと思います。また別の一面、この領域は、ペルーはアンデス山脈の高原に描かれた古代の「ナスカの地上絵」にも酷似するようでしかたがないのです。

◇その4：修行領域

改めて、本域は、母性本能（胎蔵界、女性の懐妊受胎力、沈静的）と格闘本能（金剛界、男性の能動支配力、^{こうしん}昂進的）の相対比する両面が畳み込まれた一大聖地と見えて来ます。さらに、より具体的に実像を帯びて、瀧山信仰隆盛の頃の修験道者の山岳抖擻が^{とそう}浮かんで来ます。聖地たるこの恥川包圍領域に分け入り、あるいは籠もり、この尾根筋を跳梁跋扈しながら、真言や陀羅尼を^{どくじゅ}読誦、勤行・読経の中で自然

(山・川)と融合し、神仏に帰依・陶醉し、人間の理想像を求めて修行したのだらうと思っています。最高の御秘所(奥の院)である大日堂(跡)で額づき、^{ぬか}「※1 讃仰※2 奉献行」(※1 聖人の道を探求し徳を仰ぎ慕いつつ、さらに学問・研究に精進すること、※2 寺社・偉人に対して物心を奉ること)に勇往邁進し、己を磨いて自らを一段と高いレベルの再生に導き、時には人と交わり奇怪・激震的な加持祈祷を斉行するなどにより衆生救済のために、利他行実践のために精励したのではないだろうか。

◇その5：瀧山信仰の裏行場

と、ここまで、考察している内に、平水平泉寺に置かれていました「千歳山大日堂」の縁起・由緒譚説明文(A4版1枚)を思い出しました。

その冒頭に「当山は・・・天平九(737)^{丁丑}年『行基菩薩』の草蒼にして・・・『慈覚大師』完興の靈場なり・・・祈祷の道場であった。」と記述されています。また、「瀧山の歴史」——二〇〇四(平成一六)年一〇月一日 同編集委員会編纂)——を参考に、西暦700年代の瀧山信仰の草創期から、近世までの栄枯盛衰の歴史を概観して見ました。これらから、私の考察の中で捉えたこの領域の「靈場・修行道場」というイメージは間違いではない事が分かって安堵した次第です。さらに、るる述べて来たこの領域に対する曼荼羅金胎両部の見立ては、滝山地区の瀧山信仰の歴史と共に練磨・洗練されて興隆して来たという視点に鑑みて、歴史の真実からは遠く離れてはいなという確信を持った次第です。この恥川包圍領域は、昔の瀧山信仰盛ん為りし頃は、表舞台の瀧山圏央域——「御立鳥居」(元木の石鳥居)から岩波へ、さらに土坂から慈覚大師御堂へ、そして瀧山へと至る岩波ルート域と、ならびに成沢鳥居からひなくぼ墓地へ、さらに隆勝寺から神尾へ、そしてうがい場から瀧山へと至る成沢ルート域の二つ——とは、少し異なる場所と位置付け、大日如来の仏光・神威が飽和した秘所・聖地として、穴場としての修験道の行場、つまり裏行場であったのではないだろうか。

◇その6：「恥川」のルーツ

ところで、「恥川」の名称について、「滝山 歴史の散歩道案内 解説集」(滝山の歴史案内人会発行、平成18年1月 再販)を参考に要約して見ます。平安時代中期の貴族・歌人であった藤原実方朝臣^{ふじわらのさねかた あそん}(?~998年)の娘「中将姫」は、元は「清水川」と呼ばれていた水辺で「いかんせん うつる姿は^{つくもかみ}九十九髪 我が面影は はづかしの川」と一首を詠んだ事から、以後「恥川」と呼ぶようになったとの事です。ここで、また新しい事に気付きました。「恥川」の前は「清水川」と呼称していたと言うのです。「清水」の語源は「地面や岩の間などから湧き出るきれいに澄んだ水」と言う事です。大きく言えば、瀧山山塊の雨水は、地中深くに浸み込んでこの「清水川」の川筋に湧出して流れを作ったと言えるのです。「湧き出る」は「自噴」でもあります。それらの語彙からは「誕生、再生」などが連想・イメージされて来ます。それは取りも直さず我々人間の自然の営みに依る生命誕生や、修行という難洪の儀式を潜^{もぐ}って生まれ変わったとする擬死再生に繋がるものになります。

「清い水」はそのまま「閼伽水」(仏に手向ける水)、^{あかみず}「神水」(神前に供える神聖な水)になります。

「恥川」に変更されたと言うよりは、「清水川」に恥しさを加えた、調合したと解釈しており、一層の靈験新たなる地域に育てて来たのです。今も四つの意味合い(①中将姫、②清水の湧出、③神仏の水、④羞恥)を包含し、重層を成している川であると思っています。この四は「幸福・幸運」の象徴とされている「四葉のクローバー」に内通する四であります。この恥川は、古来より「幸せ」のシーズ(種)を生産しつつこの恥川包圍領域に放散して来たのです。それ故にここに固有の曼荼羅の世界が生まれたのです。さらに私の見立てから眺めると次のようになります。「清水川=恥川」の「水」は、胎蔵界では内から外

部に流れ出んとする「女湯」(上流から下流への順向き)であります。そのペア・対比となる金剛界では外から内部へ侵入しようとする「男液」(下流から上流への逆向き)です。まさに生命の誕生を司った「神仏」の靈氣(超自然の見えない力)が溶け込んでいる神秘の水であり、かつ靈妙なゾーンであります。「男液(精子)」と「女湯(卵子)」は吸引力による超光速のスピードで衝突し、その様に大日堂隆盛の頃の壮絶かつ凄絶な連日連夜の護摩焚き行法・祈祷修法——赤々と燃え盛り炎が渦巻く空間——を重ねると、壮大な地球の誕生、ビックバーン(この宇宙の始まり)が浮かんで来ました。そもそも、「男液」は火相力を、「女湯」は水相力の二つの性質を持っています。火は全てのものを焼き尽くす、水をも蒸発させるが、これもすなわち焼き尽くすと同相の現象を生みます。つまり火は水を消し去ります。しかし、逆に、水は燃え盛る火を消し去ります。立場が逆転します。こう言う反対・相克の性質を内蔵した両液が結合の儀式を得るとエクスタシー・絶頂感の世界に至るのです。人間の誕生と言う宇宙で唯一至高のものを生みます。不思議です。物事は一方的では無い、一面的では無いと言う事を学びます。

◇その7：出羽三山湯殿山との向き合い

このように思いつつ「名勝 はづかし川」の標柱がある恥川橋に立って、先の図-1の地形的形状と恥川の水を改めて眼前に引き出すと、その水は熱を帯びたように思われ、湯殿山の御神体(主尊は胎蔵界大日如来)である赤茶けた巨岩と割れ目に連想が及び、そこからこんこんと湧出し、熱湯が滴り落ちる情景が重なって来たのです。この恥川と湯殿山を地図上で直線を引くと図-5のようになります。ほぼ45度の開き(ずれ)があります。なお両者間の直線距離は49.44 kmほどです。人間界では忌み嫌う数字のオンパレードです。45度の意味合いについて、お辞儀に当て嵌めると最敬礼に当たります。双方が異なる相手方に対し、最高の尊敬の御心を以って向き合っていると解釈出来ます。

また、物を遠くに放出する場合、投げられた物は放物線を描き、地表面に対して45度の角度での投てきが一番遠くまで飛ばす事が出来ます。別の言い方をすればその角度が、一番効率が良い最適角度、両者の位置関係・間合いから見れば最適配置という相関になります。これらの事より、私の曼荼羅空間論から言えば、恥川包圍領域(図-1)と湯殿山領域は同期波動を相互照射しながら情報交換しているものと捉えています。その人間界では忌み嫌う4と9を敢えて一身に引き受け、人間の払い除けた一切切の忌避事を受容するためのホットライン、あるいは娑婆から回収した凶禍を熱で滅却処理するための靈気流パイプラインを敷設しているようにも見えて来ます。両者共にまさに至高の母性本能の発揮と相互補完の大舞台です。この捉え方では、この関係に金剛界(男)が入る余地はありません。両方の胎蔵界(女)の相互内覧会的祭事の様相が浮かんで来ます。なお、唐突に湯殿山を取り上げたのか、吾が県内で曼荼羅といえば、出羽三山の湯殿山信仰に直結するからです。



図-5

第2章 パート2 川（凹部）から入る

次に着眼点を変えました。「山」の次は「川」です。図-1の領域をズームアウトすると南側に龍山川、やがては須川、最上川へと流れます。北側には内山川、やがては馬見ヶ崎川、最上川へと流れます。いわば凹部・凹部で繋いだ凹部歩行探査紀行です。

1. 恥川經由龍山川に至るルート～右廻り（図-6を参照）

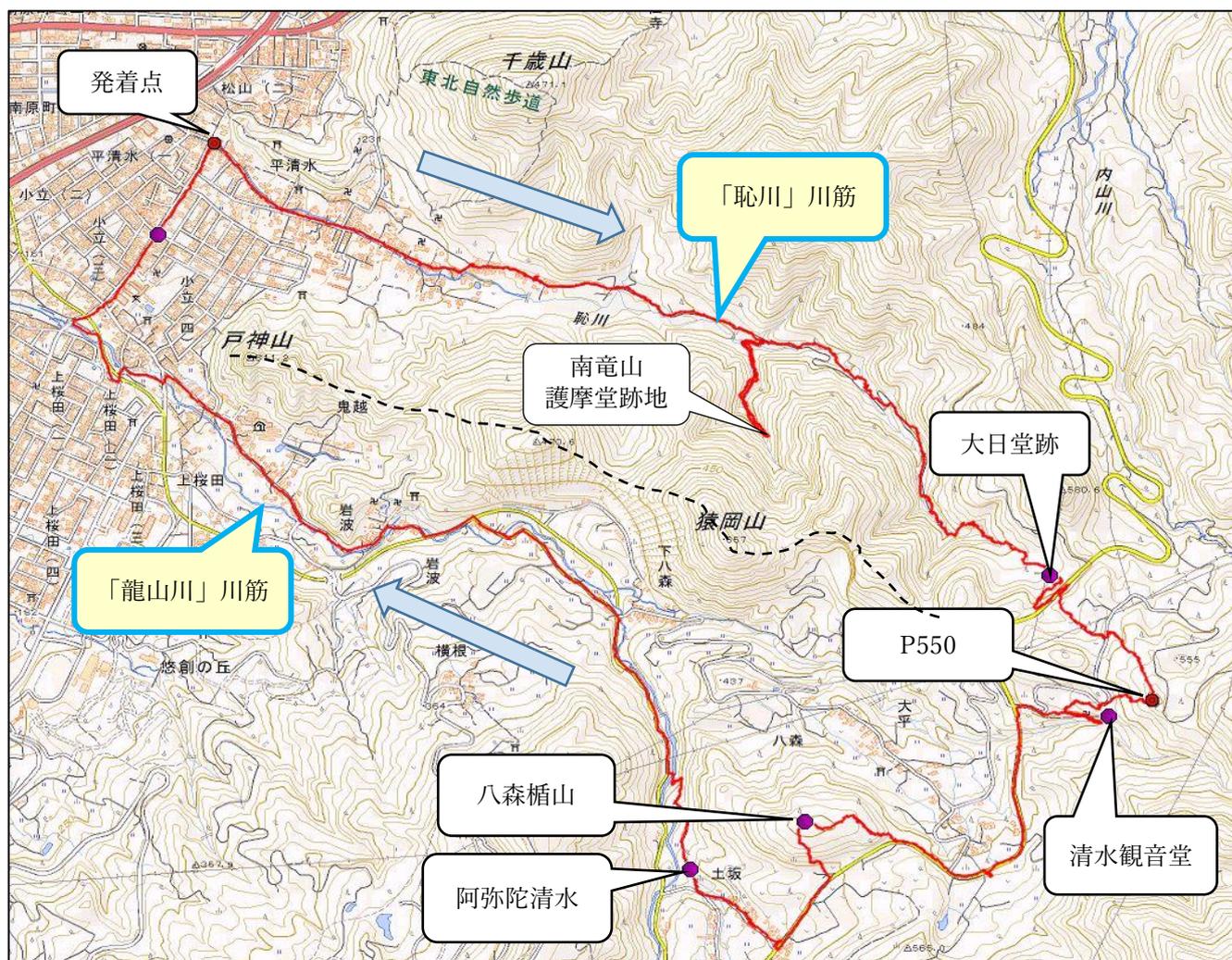


図-6

川に拘りますが、川はすなわち水です。川々、すなわち谷・川筋を繋いで歩く事にしました。2014（平成26）年4月27日（日）恥川標柱がある所（図-7）を基点として、ここを出発点に恥川を上流へ遡り、分水嶺の頂点に当たる P550 地点に至り、そこから向きを南方に変え、清水観音堂、そして八森楯山山頂、阿弥陀清水を通過し、土坂からは龍山川筋に立ち入り、下流に向かって歩き、冠橋で向きを北に変えて、発着点の場所に戻り、周回しました。通常歩く事が出来る道が無い、いわゆる「藪漕ぎ」の箇所もありましたが、この時期は、樹木は芽吹く程度であり、足元は左程不便ではなく、また、見通しが効いて、快適な探査遊びとなりました。この時も携行した GPS 機の実査ルート（奇跡・足跡）が図-6のとおり



図-7

りと言う事です。このルート形状は、全体的に棒状、先端のジグザグ模様から男根の相有りと見立てました。この外環^{いにょう}圍繞ラインは、図-1において峰々を繋いだ戸神山～猿岡山～P550のピークライン（図-6・点線）を囲むように谷・川を結んだルートとなりました。この恥川は、大日堂跡地より上流90m地点に清水が湧いており、そこから下流に向けて川となって行きます。逆に言うと、その地点から上部は、降雨の時でなければ、水流が生じる川では無いという事です。その地点は、こんこんと清水が湧いていました。下流側から上流側に向かって簡略表示（デフォルメ）すると図-8のようになります。本領域の中心を成す「恥川」本流、そのものに踏み入れ、大日堂跡地（大日如来）に到達し、拝礼・参拝し、分水嶺頂点のP550まで歩きました。まさに、今の私の命が生まれた母の子宮に辿り着いたという感じがしました。加えて、今回は、瀧山信仰に由来する「龍山川」を繋いで見ました。この足跡のアウトラインも、金胎両部界に重なって来るようで新たな発見に至った感じがします。

この周回の際に、恥川の標柱に「大日如来春大祭・大護摩供（4月28日10時から）」（於平泉寺大日堂）開催の看板がありました。これは「大変縁起が良い」と思い、当日（周回翌日）、その護摩供養に参加して来ました。その時の様子が図-9 abのとおりです。護摩焚きの炎の中で、金剛界・胎藏界「金胎両部界」の教主たる「大日如来」（=天照大御神）は、一層の輝きを増し、その神威・仏光は宇宙に広がる力を感じました。

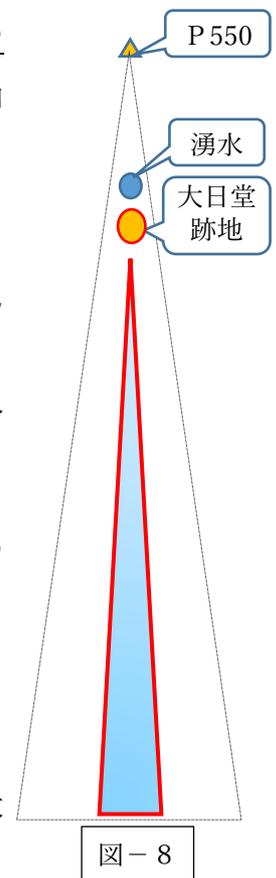


図-8



図-9 a



図-9 b

2. 恥川經由内山川に至るルート～左廻り

ここまで来てある事が浮かんで来ました。図-10のルートです。図-6の場合と同じ恥川標柱の所を発着基点として、前記ルートに共通する恥川を遡り、P550地点に至り、今度は前記ルートと反対に向きを北に変えて、内山川筋に下り、一旦、馬見ヶ崎川に到達し、千歳山分水嶺ライン（図-10の点線）の山麓を周回する事にしました。そこで、2014（平成26）年10月31日（金）図-10のルートを実際に歩いて見ました。同図はこの時も携行したGPS機の実査ルート（奇跡・足跡）です。このルート形状は、全体的に扇型・三角形と相似を成し、女陰の相有りと見立てました。このルートにおいても、P550点を下った所は藪漕ぎをしましたが、格段問題はありませんでした。

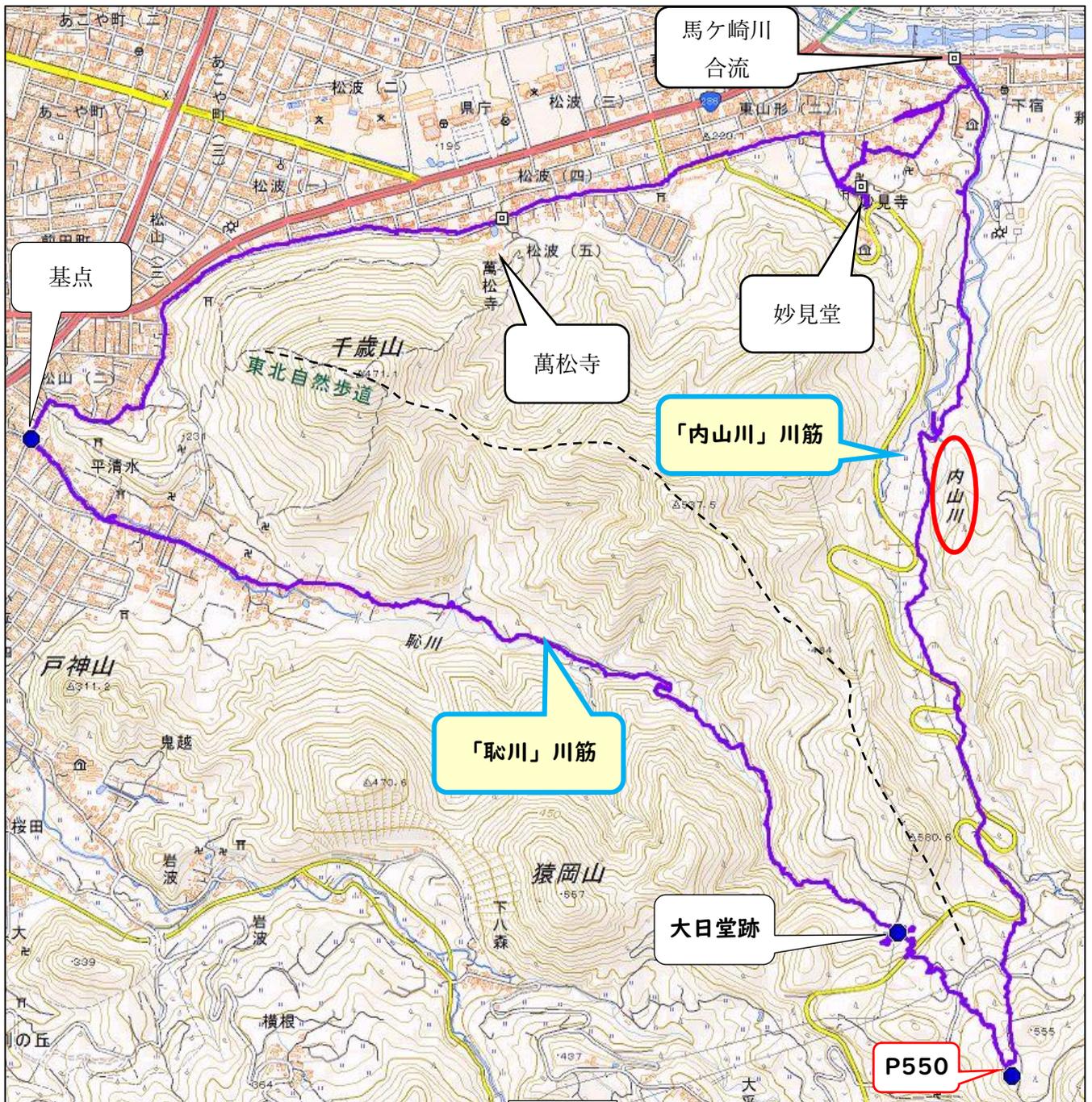


図-10

図-1・図-6・図-10のルート(ライン)を重ねると、図-11のようになります。同図を、P1~P4連結直線が水平軸となるように、左回転し図-12のようにしました。図-11および図-12のどちらから見ても良いが、北側の形状を簡略化すると図-13左の三角形に、南側の形状を簡略化すると図-13右の先端ジグザクの長方形(実際の軌跡はやや先太り)になります。図-13を合成すると図-14abのとおりになります。なお、図-14bを上下反転させると図-15のようになります。

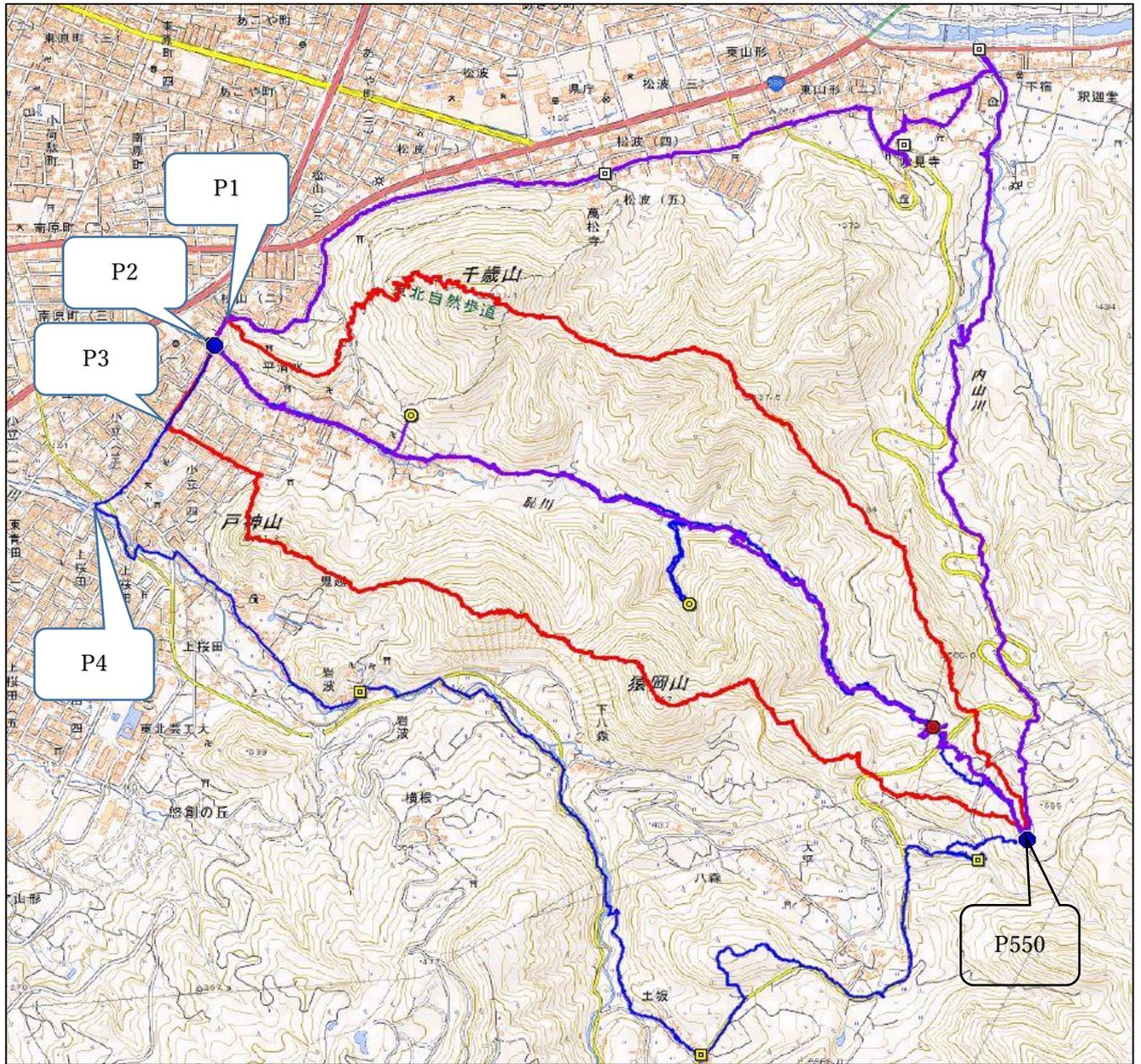


図-11

私は、三角形状ラインは女の陰物に近似連想され、四角形状ラインは男の陽物に近似連想されます。これらを落ち着きさせるには合体させる事になります。

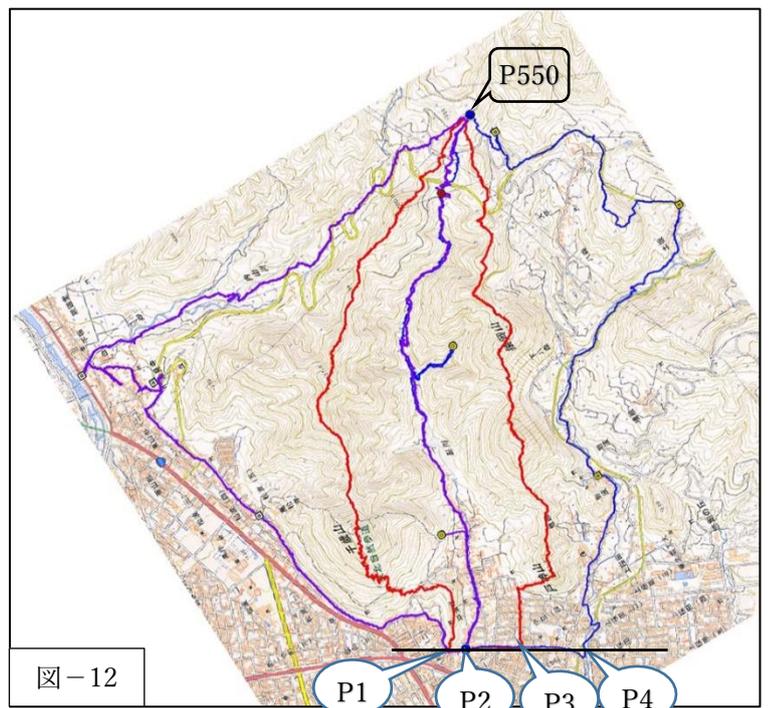


図-12

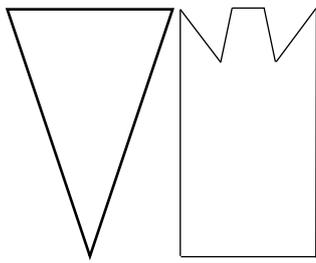


図-13

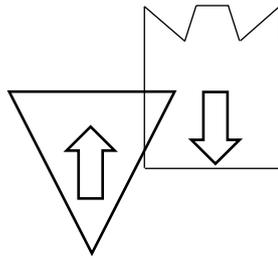


図-14a

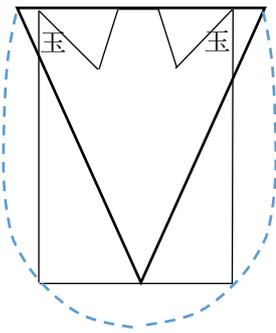


図-14b

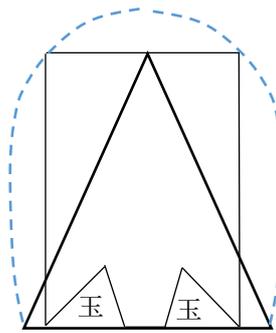


図-15

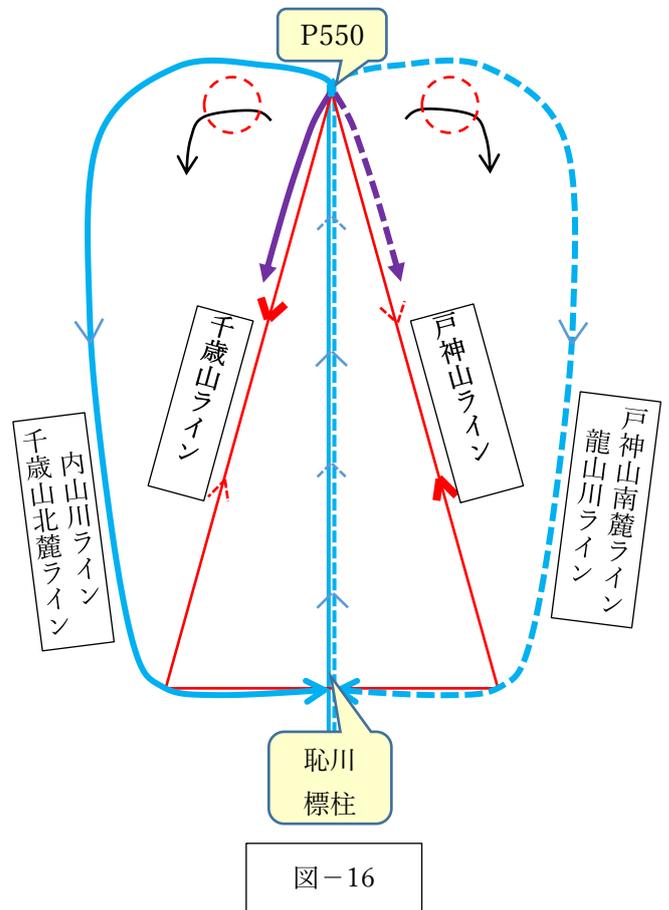


図-16

千歳山～戸神山周回ルートと合わせて、二値化（単純化）して、対象的性を持たせて図柄にすると図-16のとおりとなります。龍山川・内山川ラインは噴水の垂下ラインと相似形となります。千歳山～戸神山周回ラインは同じルートを往復している事を表しています。

改めて、史跡・寺社に着目して見る事にします。P550 地点の先の南（右）側では、清水観音堂、阿弥陀清水、八森楯山（山頂に稲荷神社有）、さんきょういん跡地、石行寺、戸神山西側麓石仏三十三体と毘沙門堂、小立石碑郡が存置しています。P550 地点の先の北（左）側では、妙見寺石碑郡、妙見院、妙見寺熊野神社、妙見堂、萬松寺、千歳稲荷神社、千歳公園内旧大日堂跡が存置されています。図-10 の領域は、昔は、さらに寺社があった一大霊地ではなかったかと想像しています。とても新鮮さを感じました。図-16 は、軍配団扇^{うちわ}と相似形です。同団扇は古くから悪鬼を払い、靈威を呼び寄せると言う意味合いで、神事などにも用いられて来たものであるが、るる記述して来た本領域の靈威性・聖地性と重なります。真に神々しい領域^{こうごう}であります。なお、図-16 において、上部に点線の丸い円を描いているが、相撲の軍配にはその位置に日月が描かれているので、これに照応する何か史跡があるのではないだろうか、有無は如何に？

第3章 里山・中山・深山^{みやま}

このような神仏の事を思い廻らす中で浮かんで来た事です。簡潔に言うと、人は死ぬとその霊は里山でしばらく間供養され、人々の供養を受けながら昇華・純化し、少し奥の中山に、最後には祖霊神として崇められ深山に籠り、時として、生きている人々の近くまで飛遊すると云われております。この領域をこの三つに比定・符号させて見ますと、里山（低山）は平清水集落近くの山、中山は南竜山近くの山、深山

(高山)はP550地点に見做せます。次に川を觀ました。川には上流から、中流、下流へと流れ、それぞれ小川、中流、大河と称します。ここで言うと、小川は恥川、中流は須川・馬見ヶ崎川、大河は最上川となります。大(高)、中(中)、小(低)の関係で、私達の視線の動きから山と川を見みます。まずは山を見ると、低山(里山)から中山へ、さらには深山(高山)へと、盛り上がる方向へ移すのが自然な動線となります。一方、川は上流(小川)から中流へ、そして下流(大河)へと流れに沿った動線が自然的です。山と川に対する人間の自然動線は反対の動きをするような気がします。この観想に、千歳山・戸神山周回ラインの図-1と図-3を、縦方向に左回転させ並べて見ます。すると、図-17のようになります。図-1女性原理と図-3男性原理の両方が想像されます。また、図-17において、左右のルート形状の左右を中央に引き寄せ、つまり重ねると図-18のようになります。外観から御幣あるいは幣が浮かんで来ました。社殿の中に立てて神の依代よりしろ、または御神体として、あるいは祓串はらえぐしのように参拝者に対する祓具として用いるようになっていっています。前記図-16の軍配団扇と合わせ、真に神々しいものもここにも出現したのです。

第4章 発展系

1. 左右に反転

前段では、図-1を上下に反転させて図-3を作っていますが、「なぜ、上下だったのか、左右では駄目だったのか」と自問しています。上下反転は直感でした。そこで、左右反転して見たのが図-19です。当然ですが、左右対称の図柄となりました。様々な形が読み取れます。前段とは別の形状に見え、さらなる想像力が発展して行きそうです。一目、翼を広げた大きな謎の蝶に見えます。この解釈については読み手の旺盛な想像力に任せる事にします。図-17と図-19の中央縦線の周囲を見ると、面白い模様(女と男の金胎両部)が色々と描かれています。

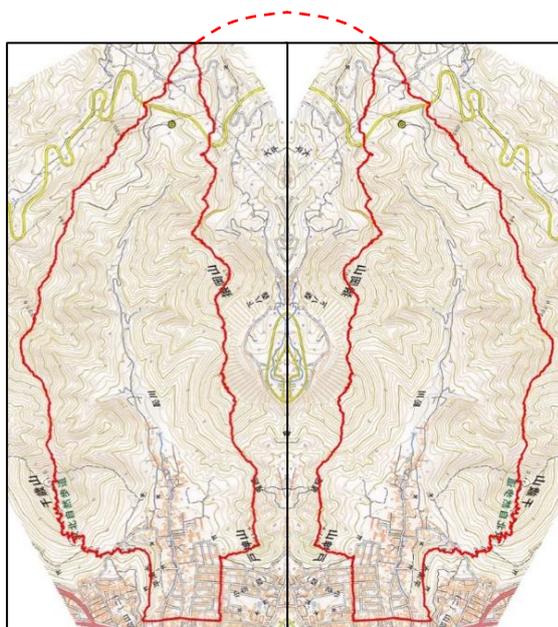


図-17

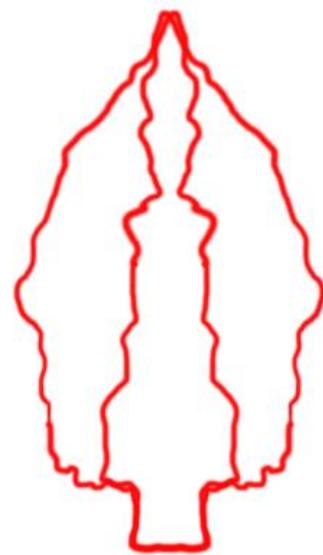


図-18

2. 楽しむ

身近な滝山地区とその周辺の里山は何処にでもある変哲もない山々ですが、そこに立ち入って、自分の持てる想像力を働かせて、持てる知識を重ねて見れば、新しい世界を創って行く事の楽しみを見出せるものです。滝山地区には、歴史を物語るに事欠かない多様な史跡・石碑石塔などが豊富に点在・散在しています。史跡等の紹介と場所は、前出の「瀧山の歴史」や「瀧山歴史マップ(瀧山コミュニティセンター取扱い、同インターネットサイトから歴史の散歩道マップとしてダウンロード可)」が参考になります。楽しみを味わえる種・素材が身近なこの周辺に沢山散らばっています。歴史の解説書、ガイドブックの字面

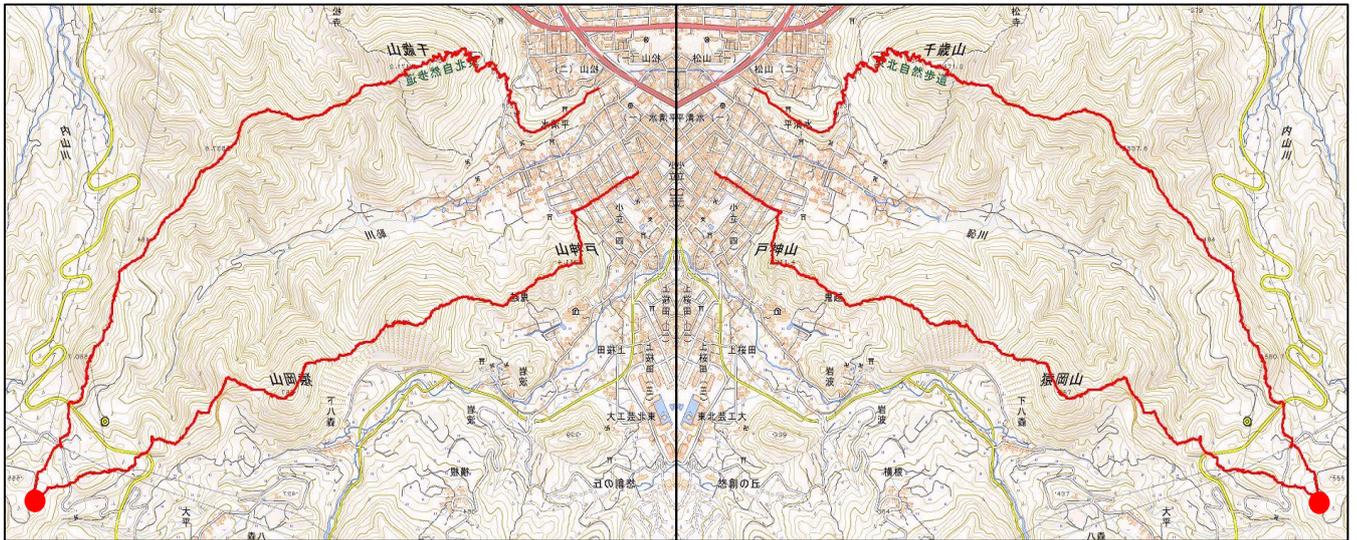


図-19

を追うだけでは、知識の吸収には良いかもしれないが、私の脳味噌の吸着力は衰退して来たので、無理には押し込みません。それらを尋ね歩く事、体を自然に投影・投入することにより、身近な里山魅力の再発見に繋がります。さらには、歴史ドラマを自分で創って行く、自作自演する楽しみが自然に湧いて来るものです。

この地球上の物理的な物や自然の形態に、自分世界の精神性を意識的に繋げて行く・重ねて行く、そして想像力を以って発展的に膨らませて行く、何と楽しい事ではないでしょうか。「想念は現実化する」と言った人がいます。至言だと思えます。心で強く想い熱望すれば、人間（心）と物事（事象）の融通を仲介する脳内器官のスイッチが入ります。心を物に移し乗せる、物を心に引き寄せると、そこに同期調整の波動が興り、見えない何かは、その人に具体的事象となって顕現化・認識される事になります。あるいは、これまで培って来た、蓄積した人生万般の潜伏英知の解凍作業とも言えます。これらは、人間万人に等しく備わった知恵だと思うので、使わず放置しておくのはもったいない事です。知識の吸着力は減退する事があっても、何人も「好奇心は永遠に不滅」です。

小峰彌彦氏はその著書「曼荼羅の見方（大法輪閣）」の中で「曼荼羅は、心、言葉、行為の三視点に依る」と述べています。私は、それに陰陽の要素を絡めて遊び心の感覚で図化すると図-20のとおりになります。これらに触発されて、文法を無視した響きによる言葉遊びですが、「心・言・行」を串刺しし、「クリエイティビリティ・レイヤー作業」（好奇心・ひらめきを重層化する遊び）、「心物↔神仏）往来シンクロナイズド作業」（異体相互を往来し同期化を図る遊び）を起動して、身の回りの出来事を創作して楽しんでおります。後付けと言われようが、こじ付けと言われようが、社会に迷惑をかける事では無いのです。他人に危害を加えることにもなりません。

私は、元来軽佻浮薄の身で、学問的史実を追求出来る能力は微塵もないので、身の丈を忘れた背伸びの無理はしません。そのような分野は学識豊かな専門家（？似非）が滝山地区にも大勢いらっしゃるののでそちらに100%譲ります。屋根の下でのお茶のみコミュニケーションは大いに結構ですが、とかく最後は他人の悪口・陰口で終わるものです。四季折々の季節に滝山地区の里山界

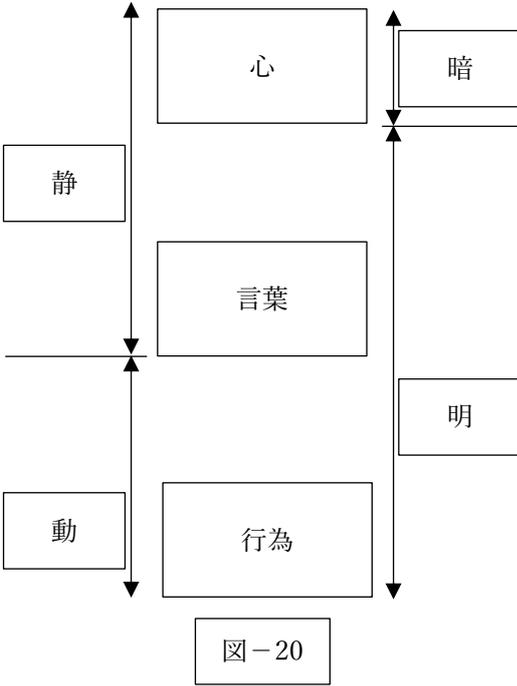


図-20

隈に立ち入って散策すれば、酸素充満した自然と溶け込む安らぎを感じ、戻ってからのお土産話（転んだこと・樹木・草花・岩石・野鳥・眺望の事等）を沢山持ち帰られます。他人の悪口を発声すると、発したその質量に比例した分の毒素（これはやっかいもので自覚症状を刺激しない儘自己増殖し、不幸招来の引き金となる恐れ有り、自業自得のブーメラン効果元素）が体内に生起しますが、こちら自己陶醉型里山散策の方は心に沁みる生命活力栄養財になります。本稿の内容・大沼の見立ては突飛で強引だとの批評は甘んじて受けます。しかし、人の陰口よりはましではないかと思っています。

【 おわりに 】

1. 「滝山曼荼羅スポット」に命名

千歳山から P550 点、戸神山に至る凸部の峰々・山々を結んだ周回山歩きからは、凹部の恥川筋が艶めかしく映りました。また、恥川から両サイドの凹部の龍山川、内山川に至る周回歩きからは、凸部の千歳山から戸神山に至る峰筋が雄々しく映りました。

この恥川を中心とした全体領域（図-10）は、今でも、ここに入った何人にも、デビット・ボーム（アメリカの物理学者）が提示した「^(※)ホログラフィー宇宙モデル（私は端的に、宇宙の万物・森羅万象は同根同体と捉えている）を意識させる魔力を持っています。畳み込まれた過去・往時の光景の復興再現要求を刺激する波動が拡散・蔓延しています。「回遊行」「巡遊行」を実体験できる里山フィールドです。

^(※)「宇宙の根っこにつながる生き方（天外伺朗氏著・サンマーク出版）」より。この宇宙の全体は、明在系（見える物質的な宇宙）と、その背後にある暗在系（明在系の全ての物質・精神・三世〔過去・現在・未来〕の時間・空間などが畳み込まれた見えない宇宙）の異なった二つで成立している、しかし、別物でもない、その二つが統合されて一つの宇宙を形成し分離不可・表裏一体である。しかも、人間も組み込まれています。

曼荼羅金胎両部の世界観と合わせて述べて来た私観は、前記「瀧山の歴史」や「千歳山大日堂」縁起説明文などにも記載されていないもので、私見と想像力で膨張・誇張させたものですが、夢・ロマンが溢れる壮大な物語・ドラマ性を感じて止まないものがあります。

まさに今様の「滝山地区パワースポット」です。この領域を「滝山曼荼羅スポット」と命名・自称し、健康増進、交流活性に資する一つのツールとすべく遊んでいます。この様な私の勝手付けは「（大沼という）固有種^{じかまき}の直播作戦」と称しています。

日本には原始的な自然崇拝がありその中に、自然の造形に性器を重ねる性器（性気）崇拝があったことが多くの書物に載っていますが、本領域に金胎両部、つまり男女陰陽を感得した事は、私の中にも原初の頃の信仰心が受け継がれて来たのかもしれませんが。

古来より、山伏修験道者の行に「胎内潜り」「V字溪谷巡り」「山岳道の激しい上下歩行・山岳^{とそう}抖擻」「滝打たれ」「御秘所通過」と言うものがあります。そう言う苦痛・煩悶・貧窮の感情に^{ほんもん}苛^{さいな}まれる難行に自己を没入し、苦行に耐え忍び、そこから反転・解き放たれ、開放感を覚えた状況を「擬死再生」と言います。苦行は死んだも同然と言う思いからです。いわゆる「生まれ変わり」です。このように「滝山曼荼羅スポット」を歩いて見て、過去の自分を反省・懺悔し、より善い人生に向けての「公序良俗・社会通念・善管注意義務」に根差した普通の社会人として精進して行く事の誓いを立てた思いになりました。一連の恥川^{そじょう}遡上は大それた行いでは無かったが、夢見心地で空想を廻らし、とても楽しい回遊歩行となりました。

2. 学び

たかが地形の事ですが、大言壮語の感で、我田引水の偏屈性で記述して来ましたが、敢えて学んだものとして一つ挙げておきます。物事万般は多面的で、多様性を持っており、一人の人間の知恵は無限と言える半面、一人の「心・言・行」は無限から見れば微々たるもの、有限値（知）である感じています。裏返せば、無限と微々足る有限との間は伸びしろとなります。学び得る裕度・空間です。この空間を埋め尽くしたいと言うのも万物の靈長足る人間ではないでしょうか。生涯学習の実践はあの世へ行くまでの人生道でもあると思っています。

3. この踏査を終えての感想をつたない短歌に

里山に曼荼羅界を写し込み 恥川に人身を重ぬる
里山に金胎両部を感じ観る 隠し御秘所に血潮が滾る
凹凸に我が身の脳裏は疼き揺れ 伊耶那岐・伊耶那美に思い寄せたる
隠された金胎襞に液流す お秘所で興起湯立の儀式
御幣棹を恥川に差し入れば 原に漂う煮沸の湯気が
世の中は複雑そうで単純か 広き宇宙はペアが大好き
宇宙世に怒涛の流れよ二気の波 対を杭建て我が身を支えん

(end)